慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケンペルの鎖国観
Sub Title	Kaempfer und Japan
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.271(104)- 289(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0289

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ケンペルの鎖国観

柴田　陽弘

I

ケンペル・バーニー祭は毎年11月23日に開かれる。[1]明治の中頃に来日したイギリス人の貿易商バーニーは箱根をこよなく愛して芦ノ湖畔に別荘を構え、そこにケンペルを顕彰する石碑を建てた。1922年のことである。碑文はケンペルの『日本誌』(1727) を引用し、日本という美しい国土を子孫に伝える大切さを訴えている。バーニーが箱根に関心を抱いたきっかけはひょっとするとこの『日本誌』であったのかもしれない。『日本誌』には箱根の自然と歴史が紹介されているからである。本書は当時、日本を知ろうと思えば誰もが必ず繙く重要な情報源のひとつだった。バーニーの石碑は長いこと忘れられていたが、登山家の槙有恒が1959年に自然保護の観点から碑文を解釈し直し、1960年には「自然保護」創刊号（日本自然保護協会）でこの石碑が紹介され、次第に注目を集めるようになった。ケンペル・ルネッサンスはこのようにして始まった。1975年に来日したエリザベス女王もスピーチで『日本誌』を引用している。こういう機運に促されて、創立20周年を迎える「箱根を守る会」が1986年に記念事業として「ケンペル・バーニー祭」を立ち上げたのである。この催しのテーマは「自然保護」であり、ケンペルはその象徴的存在となっている。また1990年にはケンペル来日300年を記念してケンペル展が開催され、各種出版物が相次いで刊行された。

江戸時代に来日した三大学者を挙げよといえば諸説紛々であろうが、たとえばケンペル、ツュンベリー、シーボルトを挙げる人も多いことと思う。[2]

日本近代がかれらから受けた学恩は計り知れないのである。[3] そのツュンベリーとシーボルトが『日本誌』を熟読玩味して来日したことを考えれば、ケンペルの意味が自ずと明らかになることであろう。この三人の共通の業績といえば、三者三様の日本植物誌（Flora japonica）を編んだことである。ケンペルが蒐集した膨大な植物標本は現在大英博物館に収蔵されているが、ツュンベリーはこれを補足する形で日本の植物相の研究を進めた。シーボルトは両者の研究をふまえて独自の植物研究を発展させた。今日でも三人の成果は遺された標本を検証することによって追体験できるのである。[4] しかし『日本誌』の影響はシーボルトやツュンベリーだけにとどまらない。カント、ゲーテ、ヘルダー、ヴォルテールなど多くの知識人が『日本誌』を通じて日本を知った。すなわちケンペルの生前に刊行された唯一の書物『廻国奇観』（1712）と死後刊行された『日本誌』（1727）が100年以上もヨーロッパの日本観を規制することになるのである。[5] 『日本誌』以後の世界旅行記や世界史のたぐいはほとんどこの焼直しの記述といっていい。『海陸旅行史全集』（ドイツ　1753）、『中国、日本、インド等の現代史』（パリ　1754）、『世界全史』（ロンドン　1747–1768）などがその好例である。ケンペルの地図もまたシーボルトの地図が現れるまで権威を維持しつづけたのであった。

II

ケンペルは波乱万丈といえなくもない生涯をおくっている。とりわけ前半生は旅から旅への生活であった。1651年にドイツ北部の小都市レムゴーに生まれ、各地の大学を遍歴したのち、まずスウェーデンへ、ついでロシアを経由してペルシャへ赴く。この間に培ったのが象限儀を使いこなして精密な地図を描く技術である。歩幅により道幅や建物を計測し、スケッチを添えることによりかれの地図は精度を増した。[6] この技能がのちに江戸参府旅行で威力を発揮する。禁止されていたにもかかわらず、ひそかに測量を行って街道筋の町や山や建物を記録したのである。[7]

ケンペルがオランダ東インド会社に外科医として採用されたのは1684年

12月15日である。翌年の11月にようやくペルシャのイスファハーンを出発してホルムズ湾のバンダール・アッバースにいたるが、不本意ながら1685年から3年間もこの地に足止めされてしまう。主観的な記述をめったにしないケンペルにはめずらしいことであるが、この地への嫌悪感をおもわず知らず吐露している。よほど耐え難い不潔な地であったらしい。かつてはインドへの憧憬の念抑えがたく訪問を切望していたにもかかわらず、現地にいたると幻滅は甚だしかった。苦行僧のみせる玄妙な技もトランス状態にある巫女も神の降臨ではなく薬物によるもので、コブラ使いに霊力はなく、猛毒の危険なヘビは実は毒抜きのヘビであるなど、インドの現実はごまかしと虚偽に満ちていると述べている。(8) ケンペルはインドを東海岸沿いに進んでクイロンに6ヶ月滞在、さらにバタヴィアを放浪し、ようやく日本へ向けて出発するのが1690年5月7日のことであった。(9)

ケンペルはどの土地にあっても博物学的調査をまめに行っている。気候や潮流などの自然現象の地理学的調査、遺跡の発掘、植物の植生の研究、建物や街路の詳細な作図、スケッチ、現地人の暮らしぶり、耕作法、料理法、造園法、環境汚染と健康との関連など、ありとあらゆるものに興味をもち、観察し、記述した。それらの膨大な記録がのちに『廻国奇観』に結実し、ライデン大学での博士号請求論文となるのである。

Ⅲ

1690年5月7日オランダの商船ワールストローム号に乗船しバタヴィアを発したケンペルは6月6日にシャムに到着する。約一ヶ月の滞在ののち、日本へ向けて出帆早々、水夫が船外に投げ出されて死亡する。7月8日には一等航海士が荷物の直撃を受け失神する事故が起きる。(10) 船員たちの乱闘事件も出来する。かような多事多難の末、長崎港に入港したのが9月24日のことである。翌25日にケンペルは初めて日本の土を踏むのである。

こうしてケンペルは「鎖国」日本に足を踏み入れたのであるが、周知のごとく外国人にはさまざまな行動の規制があった。そもそも波静かな天然の良港であった長崎の突端近くに島原町、平戸町、文知町など6つの町を

造って長崎が開港したのが1570年のことである。爾来、長崎はポルトガル貿易の本拠地として栄えた。1580年から7年間はイエズス会の領地となったこともある。豊臣秀吉はキリスト教を嫌い、1587年にこの地からイエズス会士を追放する。いわゆる伴天連追放である。1597年には26聖人の殉教という虐殺事件が起こる。かように異教弾圧は苛烈であったが、秀吉は利にさとく海外貿易には力を注いだ。基本的に徳川幕府もこの路線を引き継ぎ、長崎はポルトガル貿易と御朱印貿易でますます栄えた。その一方で、1612年にキリシタン禁教令が出され、1622年には55人のキリシタンが処刑される（元和の大殉教）。1635年に日本人の海外渡航禁止令が発令される。また長崎の有力な町人25人の出資で港の岬の突端に人工の島を造り、ポルトガル人を隔離しようという政策が発動した。これが出島の由来である。(11)

出島は1636年に埋築され、ポルトガル人はすべてこの人工島に隔離収容されることになった。キリシタンの取締りと風紀紊乱を正すという点で一挙両得な施策であった。1637年に島原の蜂起（島原の乱）でキリシタンの脅威を思い知った幕府は徹底的な弾圧を決意する。こうして1639年に在留ポルトガル人と混血児を国外追放にし、ポルトガル船の寄港を禁じた。出島造築3年にしてポルトガル人が去ったあとにオランダ人が入り込んだのは、(1) 25人の出資町人の嘆願による、(2) オランダが島原の乱で原城を砲撃して幕府の心証をよくした、(3) ポルトガルの秘密文書の一節を暴露して、ポルトガルが日本を支配しようと企てている動かぬ証拠である、とオランダが密告したこと、等々が理由であると説明されている。

オランダが平戸の商館をたたんで出島に移ってくるのが1641年のことである。以後、1859年の開国まで218年間、ヨーロッパ文明の息吹をつたえる唯一の窓口となった。出島の築造には地元の安山岩と5万立方メートルに及ぶ大量の土砂が使用された。面積はおよそ15,000平方メートル、南北233×190メートル、東西70×70メートル、道路幅約3メートル、道路の総延長は218メートルである。出島の北側に表門があり、番人がつねに出入りを監視していた。出島の石橋の袂の高札には、傾城以外の女性、高野聖以外の僧侶、山伏、乞食などの出入り、また傍示杭内に船を乗り入れるこ

と、断りなく出島の外に出ることを禁じる、と書かれていた。[12]

Ⅳ

オランダ船は1621年から1847年までの226年間に延べで715隻が来航し、そのほかに27隻が難破したということである。[13] バタヴィアを出港するのは通常６月か7月であった。季節風を利用してたどりつくためである。祝砲を発射しながら長崎に入港するオランダ船は帆を畳み、たくさんの曳船に曳航されて出島沖に停泊した。入港するとただちに積荷目録と阿蘭陀風説書が提出され、通詞の翻訳作業と積荷検査と人数改めが平行して進行する。積荷は出島の水門から運び入れられ、検使役が点検してイの蔵とロの蔵に分類収納される。この蔵にはそれぞれユリとバラという優雅な名前がついていた。全国から集まった商人たちはまず生糸の入札から始める。2～3ヶ月で取引が終了すると、旧暦の9月20日前後にオランダ船はふたたびバタヴィアに向け出航した。

主たる輸入品は生糸であったが、やがて砂糖が大量に輸入されるようになった。生糸のほかには毛織物、木綿、麻、鹿皮、鮫皮、麝香、白檀、沈香、檀香木、胡椒、丁子、肉桂、甘草、サフラン、象牙、水牛角、ガラス製品、地球儀、天球儀、天体望遠鏡、珊瑚樹、犀角などである。これらの品物が日本人の食文化や衣装文化に与えた影響は計り知れない。またオランウータンや駱駝など奇獣珍獣のたぐいも輸入された。幕府はとりわけ在来種の小型馬とは違う大型馬の輸入に積極的だった。一方で日本からは銀、銅、金、樟脳、陶磁器、漆器、タバコ、醤油、屏風などが輸出された。日本の陶磁器はヨーロッパの貴族に珍重されたため大量に輸出された。[14]

さてケンペルはこの出島専属の医師として赴任した。出島の医師は通常一人であったが、そのほかに支店長に相当する商館長（カピタン）が一人、事務長の次席商館員（ヘトル）一人のほかに、倉庫長、書記役、下級商務員、調理師、大工、鍛冶屋、黒人奴隷がそれぞれ何人かいた。出島に日本人が立ち入ることは厳しく禁じられていた。出島は長崎奉行の管轄化にあり、奉行の命をうけて貿易政務にたずさわる町年寄、出島の管理責任を担う出島乙名、通訳の

通詞（大通詞、小通詞、稽古通詞）、探番（門番）、買物使、船番、料理人、給仕、庭番、組頭、火用心番など100人ほどの日本人が詰めていた。

ケンペル赴任当時のカピタンはヘンドリック・ファン・パイテンハイムであった。かれは1691年2月にこの商館長に随行して初めての江戸参府旅行を行っている。翌年3月にはコルネリス・ファン・アウトホールンに随行してふたたび江戸で将軍に拝謁している。時の長崎奉行は宮城和澄、川口宗恒、山岡景助である。[15] 1688年から奉行は3人体制になった。長崎で政務を司るのが2人、毎月正副の職位が交替する。第3の奉行は2年毎に着任し、交替に先任奉行の一人が江戸に向かうことになっていた。将軍に執務報告書を提出し、口頭で報告するためである。[16]

V

初代オランダ商館長のヤックス・スペックスから最後の商館長メーステル・ヤン・ヘンドリック・ドンクル＝キュルシュウスにいたるまで、商館長は総勢163人を数えるそうである。商館長は年一回江戸に出向いて将軍に拝謁することを義務づけられていた。ケンペルは日本に滞在した2年ばかりの間に2回も江戸に上っている。その間の見聞を詳細に記した『日本誌』の記述は大変興味深いのであるが、ここでは本書の付録である「鎖国論」に的を絞りたいと思う。[17] ケンペルの鎖国論は一言で言えば鎖国肯定論で、日本の鎖国にはもっともな理由があるというのがその骨子である。[18]

まずケンペルは自然には境界がなく、人為的にこれをわけ隔てるのは天理に悖（もと）る行為であると述べ、その点で日本人が神聖な人間社会を卑劣にも隔離して憚らないのは神聖な神の法と自然の法則を破る行動であると非難する。外国人の入国を禁じ交流を断っていること、入国させても仇敵のように見張っていること、自国民を海外へ出さず、漂流民をも逃亡者として処罰すること、国外脱出者は磔（はりつけ）にすること、漂着外国人を投獄すること、等々を例として挙げている。しかし、とケンペルは論を進める。しかし日本の鎖国は日本の立場からは納得できるのであると。

そもそも国家はたがいに憎しみ合い抗争してやむことがない。もし自然

がすべての国々に必需品を供給するなら、各民族は領域内で自足して、他国を侵略することも、他国から災禍を蒙ることもなくなるであろう。公共事業や私的稼業は順調に営まれるし、荒蕪地や棄地も開墾され、学問・機械技術・徳義人道の面でもいっそうの発展が見られることであろう。日本は小世界に閉じこもって近隣諸国と交わらず、他国に煩わされずに安穏に生活している。異国との交流は、ただ生活のため、便益のため、贅沢のために物資を入手するための手段である。自然に恵まれ、必要物資を豊富に授かっており、多年の勤勉な努力により国造りが完成している国家は、外国に処する態度としては、計略に乗らず、貪欲をはねかえし、騙されないように、戦わないようにしつつ国境を守るのが上策なのである。地理的条件やその他の条件がこのような隔離を可能にし、国民が勇敢で国土を守り通せるならば、これは納得できる国家の行き方であろう。日本はまさにそのような条件に恵まれた国である。

日本はまず第一に温和な気候に恵まれている。暑さも寒さも程度を越えることがなく、土地は豊饒である。欠点といえば、平野が少なく、岩礁地帯や山岳が多い粗毛地であって、努力を怠れば荒蕪地化してしまうことは疑いない。ところが勤勉と節度によって険しい岩山も貧地もことごとく耕作されて放置されている所がない。耕作地のない所では森林で山菜を採集し、これを上手に調理することを心得ている。山野に自生する植物の根、海の動植物、毒魚ですら贅沢料理に変身させる術を身につけているのである。神の造化の妙はみごとで、たくさんの島が南北に散らばって、土地柄の違いから各種各様の物資を産し、各州各島の間で融通利用されている。ケンペルはここで日本各地の名産を詳細に列挙している。

日本人は手先が器用で頭がよく、とくに金銀銅等の鉱物加工技術では右に出るものがいない。武器を見れば鉄を鍛える術にいかに長けているかがわかるのである。金と銅の合金である赤銅の技術は他に類を見ない。これに金をかぶせて黄金に比べられるものさえ作り出す。また均質極細の生糸で仕上げた上質の絹織物も織り上げる。米からはシナの酒より上等な銘酒をつくり、酒Dsjakaと呼んでいる。楮(こうぞ)から白く丈夫な紙を製する。住宅や

家具に艶のよい漆を塗る。漆細工のごとき完璧な作業はシナ人などのとうてい為しうるところではない。さらに国内の交易が活発になされ、商業は殷賑をきわめている。

日本人は孔子が天来の哲学であると考えている。また定まった音階の音楽や高等数学ももっていないが、その点では他の民族も似たようなものである。神は人間で十字架にかけられたというようなキリスト教の教えに帰依せよと勧められても、日本人は戸惑うのではあるまいか。100年前にイエズス会士の不撓不屈の努力で宣教はうまく滑り出したが、過った宣教で流血の終局になった。日本人のような宗教心の篤い国民であれば不当に外来宗教を弾圧などしないものである。布教の手段を誤ったのだ。道義の実践、敬神の務め、清浄な生活、心の修養、罪業の懺悔、永遠の幸福祈願などにおいて、日本人はキリスト教徒以上に熱心である。

日本人は外科よりも内科に熟知し、鍼と灸という外部からの施療により病気の根源を体内から駆逐しようとする。毎日温浴して多くの病気を免れている。各地に特効ある温泉が多く、手足の麻痺した病者を湯治させるのである。

日本は法律と秩序の女神テミスの秘伝を知らない、と貶す者もいるかもしれない。なるほどヨーロッパのような煩雑な訴訟手続きには欠けているが、簡略な裁判だからといって当事者に不利になるというものでもない。むしろヨーロッパの裁判には欠点が多いのである。以下では鎖国令下の日本の施政とそこにいたるまでの動機を記述する。

Ⅵ

ケンペルはまず日本草創の故事来歴から語り始める。神武帝が日本建国の偉業を成し遂げてから、最高の至上神である天照大神の直系の子孫により統治されてきた日本は、やがて貴族たちの権力志向に促されて動乱が度重なるようになる。天皇は皇位継承者に将軍位を授け、紛争を平定しようとする。500年前に頼朝が俗界の皇帝たる将軍位を確立するが、朝廷の威光はゆるがなかった。徳川家康が1603年に征夷大将軍に任ぜられ徳川幕府

を開いて朝廷とは別個の権力を占有するに及んで、君主権の完全分離が実現する。すなわち家康が俗界政治の全権力と兵馬の権を手中にし、一方で教界の権力は天皇に留保し、現つ神として正統の神々の継承者と認めるというものである。このように国家形態の基盤が整った。

家康の子孫は厳しい法制を敷いて諸侯を治め、官職を与えて義務で縛り、位階勲を授けて恩に着せた。地領からの収入は費消するように仕向けて謀反心を削ぐよう図った。一応人気のある現行の制度を恒久化するためにあらゆる努力を払った。外国の文化の移入を嫌ったのもそのためである。キリスト教についても厳しい追放令を敷き、先祖伝来の神々を崇拝して帝を奉戴するよう仕向けられた。新しい精神は国家に不利な結果を招来すると考えられ、必然的に鎖国策が考慮されるようになった。永久に門戸を閉ざし異国とかかわりを持たぬことが、日本の政治形態にも風土にも照らして国民の幸福と幕府の安全のために必要な措置であるとの見解に達したのである。

外国人の中でもポルトガル人ほど日本に根を下ろし、日本にとって危険な存在になった民族はなかった。かれらは新しい物資と宗教を利用して一部の国民の心を捉えたが、さらに支配者に自らなろうとする陰謀を企てた。この陰謀の証拠を喜望峰の岬方面で入手し幕府に知らせたのはオランダ人である。ポルトガル人のさまざまな陰謀や意図がしだいに明らかになり、当局は不安を抱くようになった。こういう外国の導火線を排除する計画として、まずポルトガル人の国外退去と日本人の海外渡航の禁止が実施された。新しいキリシタンに対しては、キリストの御名を呼ばず、十字架を身につけず、キリストを信仰しないむね誓約させた。キリシタンはなかなか改宗しなかったので絞首刑と火あぶりで迫害した。宗徒は頑強に抵抗し、島原で最後の戦いを挑んだ。力尽きたのは1638年4月12日である。これをいわゆる島原の乱という。オランダは長年幕府に忠誠を尽くし、ポルトガルにも、一揆を起こした有馬の連中にも敵対する立場をとってきた。家康と秀忠から御朱印状を戴いているにもかかわらず、不当にもこの権利は制約を受け、唯一の仲買人として扱われるにせよ、囚人のように監視され、

日本国民との一切の接触が遮断された。こうして出島の狭い空間に押し込められた代償が年間50万オンスの貨物販売を許可するというものであった。

鎖国令によって幕府は絶大な権力を発揮するようになった。諸大名の権勢は地に墜ち、外国の影響は排除された。将軍は全国津々浦々をがっちりと掌握している。他国に見られない現象である。全国を礼譲一点張りの学校に変えようとするかのようである。これは古代の祝福された時代の再現であり、優秀で不敗の強さが他国の羨望の的になった。現在の日本の支配者は将軍の綱吉で、気宇壮大にして天性優れ、国法を遵守し、臣下には寛大である。幼少時に孔子の教えによる薫陶を受け、将軍としては国民と国柄に合った政治を行っている。

他国に比べて礼節、道義、技術、優雅な挙措の点で優れ、豊穣な沃土、強健な体、勇敢な精神、豊かな生活必需物資、国内の平和など環境に恵まれている。かつての自由な時代に比べても、今が最高に幸福な時代であるといえるのである。

Ⅶ

以上が「鎖国論」の要約であるが、編者のドームはこれに反論を試みている。[19]

(1)「日本は技術や学問の点で、他のあらゆる諸国よりも勝れている。」

なるほど日本人はある程度の技術や工場を早くから持ったが、旧態依然たるままにとどまりヨーロッパ人に追い抜かれてしまった。物事を深く掘り下げることをせず、発明精神は専制政治に抑圧され、習性に甘んじているばかりである。アジア人の作品には流行というものがない。インドの綿製品や日本の陶磁器のごとく、古くからあるが進歩がないのである。学問においても大進歩をかつて遂げたような分野が見当たらない。アジアの哲学、物理、数学は学問の名に値しない。孔子の教えはソクラテスに比べればあまりに現世的すぎ、政治論に偏りすぎている。医学は病因のみを取り上げて人体の知識に欠け、不完全な経験的知識に基づいている。

アジア諸国は専制政治下にあるので、立法も優秀ではない。ヨーロッパの裁判手続きに欠点はあるにせよ、アジアのように裁判官の恣意のままに上訴もしにくい仕組みは問題である。日本の法律は非人間的な残酷さを示し、聖賢の立法精神に悖るものである。処罰も将軍の意のままで、犯罪にしようと将軍が思えばそれが犯罪になるのである。ケンペルは賞賛する言葉の行間に自ら矛盾を認めているように思われる。

宗教においても、悟りと生命を極楽に託する大思想を生み出しはしたが、そこからの進歩が見られない。理屈抜きに高踏的で、念仏を唱えれば極楽往生を遂げうると説く。他の宗教に寛大で、妥協的である。この点はいい面であるが、これを外来の宗教に切り替えようとしなかったのは、理解しにくい教理を含んでいたからだとするケンペルの主張は正しい。

(2)「日本国民は最後の革命以来、極めて幸福な状態におかれている。」

ケンペルが語っている諸事実からは、日本国民が幸福だと思っているようには見えない。将軍は諸大名の生活を家族から引き離し、貧乏になるように仕向け、やむなく領民を絞らせるように誘導している。諸大名は将軍の絶対権の下で不幸だと感じている。一般の民は高札の掟に縛られ、処刑の恐怖に脅えている。監視の目はどこでも光っており、自分だけでなく、家族の行動にも、町内の町民の行動にも連帯責任を負っているのである。お上の命令は遵守され、犯罪抑止効果もあるであろうが、知人の行動を監視し、知人からも窺われる生活は不幸ではないか。しかも生命財産は裁判官の自由裁量に委ねられているのである。高い運上金を代官に納めるため、やむなくあらゆるものを食料にしている。オランダ人との取引では貪欲に利をむさぼる。外国との接触は禁じられ、外国製品は禁制品である。これが幸福な状態といえようか。日本人が簡単に死を観念し自殺するのはその証拠である。それは沈着な勇気のしからしむるところではなく、不幸な生活に飽き飽きしてのことなのである。

(3)「日本史には勇気と沈着を示す物語が多く、ムチオス、スケフォラス、ホラチエル等の勇将に匹敵する英雄が日本にはたくさんいる。」

『日本誌』第2巻の日本の歴史はこの記述に矛盾している。どこにホラチ

エルの偉大な行動があるだろうか。日本の歴史そのものが無味乾燥で、勇気に見える行動は上述のように苦悩と厭世からくるものである。アジア人の行動には規模が欠けている。祖国のため、自由のために行動したという偉大さが欠けている。全時代を通じてひとつの型の革命の繰り返しで、原因と結果が不分明な悲惨で些細な物語にすぎない。時代が異なっても、同じ話の蒸し返しのような気がするのである。そもそもアジアの年代記そのものの記述と価値におおいに疑義がある。

(4)「日本はあらゆる外国人の渡来を禁じ、日本人の外国旅行を禁じたが、この鎖国は正しく、政治的に有利である。」

この所論に異論を差し挟む余地は少ない。鎖国はケンペルほど言を尽くして擁護すべきほどのものではないが、国の安全のためにとる制度はすべて正しい。臣民も国家の成員として自由の制限は全面的に甘受するより仕方がない。問題は日本の政策が政治的に得策か、という点にある。日本は必要な物資を自足しており、外国に頼るところは全然ない。外国人の自由な入国は国の安寧を損なう惧れ大であるのは、ポルトガルの先例が教えるところである。キリスト教布教と日本征服は結びついていたから、キリスト教を排撃したのはもっともなことであった。日本人は本来宗教的に寛容であるが、侵略的な外国人と日本人の反乱分子を処罰したのは正当であった。反乱分子をすべて排除するのは難しく、鎖国政策を敷いたのは当然の措置であった。「日本人は自給自足できる国なので、鎖国政策をとっても不自然ではない」というケンペルの主張は一理ある。しかし大きな贅沢と外国の悪習に染まぬために役立つと思われるが、国民が閉塞状態にいては文明開化へ進むことができない。現状のままでは、日本は野蛮国に成り下がるだろう。精神はしなび、手本も刺激もなくなるだろう。地味は衰え、ますます貧乏になることだろう。世界と自由に貿易ができればこのような状態に陥ることはない。日本の開国は日本にとっても外国にとっても肝要であるが、当面、国内の革命は期待できないし、開国を迫る外国もまずないであろう。いずれ地理的にも近いロシアが国勢を恃んでその挙にでるかもしれない。

Ⅷ

今日の研究者の間では「鎖国」という言葉の厳密な語義からみて、江戸時代は鎖国下にはなかったというのが暗黙の了解事項になっている。[20] すなわち幕藩体制下で幕府は貿易をオランダと中国に限定したが、実際には長崎以外に朝鮮と対馬、琉球と薩摩、松前と蝦夷という窓口が開かれていた。それゆえ「鎖国」にかわる概念として「海禁」を持ち出す研究者も少なくない。当時、海外への窓口は四つあり、日本人の海外往来が全面的に禁止されていたわけではない。対馬藩の宋氏は朝鮮のプサンのわかん倭館に藩士と商人を送って朝鮮との折衝にあたらせていた。役人のほかに僧侶や商人が常駐しており、多いときで1200人、幕府隠密の調べでは500人はいたということである。琉球は清と日本の両国に服従している関係にあり、しかも独立国家でもあった。蝦夷地も外国扱いで決して自由に往来できたわけではないが、行き来はあった。ある役割と特権をもつ日本人が海外へ行った、という実態であった。[21] また東南アジアには朱印状によって航海の安全と貿易が保障される朱印船が渡航していた。

さらに幕府が貿易を独占していた、という表現は不正確である。1616年にヨーロッパの外国船の寄港は平戸と長崎に制限されたが、貿易を独占していたといっては実態と乖離することになる。貿易には輸入品の売買益と貿易に付随する手数料が発生する。幕府は貿易全体の管理をしていただけで、利を得るのは長崎という町と特権商人たちだった。そこには武士は商売に立ち入らないという原則が働いていた。あくまでも兵商分離の一環であって、決して利潤を独占する体制ではなかった。すなわち幕府は国内市場に必要な物資の導入をこういう形で管理していたのであった。[22] またキリスト教の弾圧は日本独自のものではなく、アジア諸国は一様にキリスト教を禁じている点にも注意したい。[23]

さて「鎖国」という言葉は1801年に生まれた。元長崎通詞の志筑忠雄（1760–1806）が自分の造語であると書いている。『廻国奇観』収録論文「今の日本人全国を鎖して国民をして国中国外に限らず敢えて異域の人と

通商せざらしむる事、実に所益なるに与れるや否やの論」の凡例にある。また鎖国は幕末の開国論議の対語として浮上してきた概念であるともいえよう。ケンペルはすでに見てきたように、日本が「国を鎖している」と感じていた。ヨーロッパの人々はそう見ていた。この感覚は明らかにキリスト教禁止と結びついたものであろう。(24)

ケンペルは五代将軍綱吉の知遇を得ていたためか、一人の統治者の最高意思に支配され、世界と隔絶した鎖国体制をとる徳川の治世を肯定し、かつての戦国の自由と今とを秤にかければ安定した今を国民は採るに違いないと述べている。ケンペルは悪法と評判の高い「生類憐れみの令」ですら肯定的に解釈している。(25) これを受けてボダルト=ベイリーはケンペルを擁護して次のように論じている。

(1) すなわち綱吉は社会的弱者や貧者の保護を目指した名君である。捨て子は禁止され、親が育児できない場合は役人が代わって世話しなければならず、捨て子や子殺しを防止するため妊婦と7歳以下の子供は登録を義務づけられた。これは世界に先駆けた戸籍登録の思想である。流人には食事と宿舎が用意された。牢屋の環境の改善にも取り組み、囚人の福利厚生に目が配られた。入浴や冬の衣類支給がそれに当たる。これは社会福祉立法の先駆である。「生類憐れみの令」はこの施策の一環であったとみなすことができる。鷹狩りに使う犬が逃げ出して野犬化すると、これを打ち殺す人が出てくる。殺された犬の死体が腐敗して衛生問題が生じた。だから犬を愛護すべきであるとの法を定めたのであって、決して悪法ではない。百万都市江戸に犬の登録を義務づける鑑札制度を導入したのも世界に先駆けた制度であった。当時の武士社会では「斬り捨て御免」という特権があったが、犬も傷つけることまかりならぬというのであれば、人をどうして殺せようか。いわばこの法は武士の特権の制限も意図しているのである。この法律の前では、武士も町人も同列におかれ、身分制の止揚も目指すものであった。

(2) 綱吉は絶対的支配者たらんと欲した。専制君主ではない。かれは臣民に等しく責任を負おうとした。旧態依然たる武士階級を経済的社会的

変化に合わせて改革し、野蛮な風習、残酷な所業が武士にふさわしいとされた風潮を改め、仁の道へと向かわせ、庶民の模範になるように導こうとした将軍であった。

(3) マックス・ヴェーバーは『経済と社会』で絶対的統治権力を論じている。絶対的支配者が志向するのは無制約の権力である。世界史上普遍的に絶対者は同じ行動様式をとる。まず政治の実務者に絶対服従を要求し、その要請に適う人材を登用する。こうして支配者に奉仕する官僚が生まれるのである。かれらの専門知識が権力闘争に有用になる。勝手方老中として堀田正俊が登用されたのはその好例である。そのほか勘定吟味役の荻原重秀も行政の専門知識をもつ官僚集団の一人であった。ヴェーバーの「知識による支配」理論はこの事情を指している。近代国家はこのように発展していった。綱吉は中央集権化政策により近代化を進めた最初の将軍であった。

(4) ケンペルが理想としたのはヒトラーやスターリンではない。公共の福祉を目標とする支配者である。かれは魔女裁判に名を借りて無辜の人々を虐殺したことで有名なレムゴー市の出身であり、叔父が為政者の恣意により処刑された経験を持っていた。公平で開明的な支配者をケンペルは考えていた。こうして綱吉を理想の支配者とみなしたのであった。

(5) ケンペルは綱吉に三度謁見している。通常は一度の謁見がケンペルの場合二度にわたって行われたことがあり、特別の謁見ではドイツ語の歌まで所望されている。この異例の厚遇が上述の綱吉評価につながっているかもしれないのである。

ボダルト=ベイリーの解釈は相当の異論を受けるのではあるまいか。「斬り捨て御免」の制度を杓子定規にとることは危険である。無制約に運用できたわけではなく、たとえ無礼な町人に遭遇しても、まともな武士たちは面倒を避けたのではあるまいか。また「生類憐れみの令」において綱吉の儒教的側面を軽視しすぎているのも気になるところである。武士である綱吉がおのれの特権を制限して町人と同列になるというような発想は考えにくいのである。

Ⅸ

ケンペルの鎖国論が思想家たち、とりわけフランスのディドロやドイツのカントらの啓蒙思想家に及ぼした影響は計り知れない。カントは日本を理想国家とみなし、鎖国は平和を保つ方策であったと評価している。戦乱に明け暮れてきたヨーロッパから見て、平和で繁栄しているアジアの肩をもちたくなるのは自然な気持ちというものであったろう。ところが植民地獲得競争が激化する十九世紀には評価が逆転する。まずケンペルの「理想国家」は専制国家の烙印を押されてしまう。「自足する国民」は、折からの進歩思想からは進歩を志向しない退嬰的な国民ということになってしまう。アジア諸国はいわば猟の獲物として、ヨーロッパ文明の恩恵に浴さしめるという大義名分のもとに侵略の対象とされるのである。上述のドーム博士の主張は「鎖国得失論」の典型である。鎖国のために世界から取り残されてしまった。貧困と無知はそのツケであるとする。そのために日本は開国して強圧的体制を解除しなければならない、というのである。

この問題をつぎの視点から論じてこの論を閉じたい。その一は「オリエンタリズム」の視点である。[26] アジアとヨーロッパの関係は蜜月から圧制へと変化した。その転回点は十八世紀の産業革命であろう。十六世紀に海を通じて物品の交流が始まった蜜月関係は、やがてアジアは専制政治により個人の自由が抑圧された後進国であると判断されるようになる。アジアは長い停滞と不変により貧しく遅れている。かつては贅沢品であった物品は手に入りやすい商品に変貌した。アジアの野蛮国は文明化されねばならない。こうして尊敬をこめて眺められたアジアは「無知」から救い出されねばならない対象となった。世界制覇の大義名分として論じられるのは「文明化の使命」である。アジアの植民地化はこうして正当化された。鎖国観の変遷はヨーロッパの東洋を見るまなざしの変化を反映しているのである。東洋進出の実践的戦略として鎖国観の軌道修正が行われてきたといえるのである。[27] その二はアジア側の「ヨーロッパ受容」の視点である。アジアは近代化の過程で、たとえば中国は過去にいつまでも拘泥し西洋の

受容をしぶる姿勢をとりつづけたのに対し、日本は技術や制度の移入のみならずヨーロッパ的価値観をも積極的に受容しようとした。軍事力の強化や工業化を推し進め、ヨーロッパ化の趨勢のなかで唯一その覇権主義の撹乱者となった。アジアに遅れて参入したにもかかわらず、ヨーロッパ列強と植民地競争で覇権を争った国になった。結局は敗戦でヨーロッパ型世界秩序に組み込まれることになる。東洋の国でありながらヨーロッパのまなざしをむなしく持とうとした唯一の国でもある。その三は日本が近代化のために富国強兵策をとるに当たって「鎖国」を負の遺産ととらえるようになったことである。ヨーロッパ列強に遅れをとったのは鎖国のせいではないか。封建制度や鎖国、これこそが近代化に遅れた元凶であるという論議が主流となった。これはケンペルの肯定論が逆転したヨーロッパの議論が日本に受け入れられたことをも示している。一時期の中世のイメージと同じように、こうして江戸時代も負のイメージで捉えられるようになった。しかし鎖国はしていなかったのであるから、上の議論は意味をなさない。今われわれはケンペルのイメージに立ち戻ってもいいのではなかろうか。

注

(1) 「ケンペル・バーニー祭」（箱根町教育委員会「箱根を守る会」）
URL:http://www.asahi-net.or.jp/~gn2h-tj/m-prof/main02.html

(2) ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみたトクガワ・ジャパン』（六興出版　1992）p.161ff.

(3) シーボルトが1825年にケンペル、ツュンベリーの学徳を讃えて建てた顕彰碑が今も出島に残っている。（長崎市出島和蘭商館跡内）

(4) 「シーボルト日本植物コレクション」
URL:http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/2000Siebold/index.html

(5) 内田潔「ケンペル」（「自然科学のとびら」Vol.7No.2神奈川県立生命の星・地球博物館2001．6.）「ケンペルとバーニー」（「自然科学のとびら」Vol.7No.3神奈川県立生命の星・地球博物館2001．9.）
URL:http://nh.kanagawa-museum.jp/tobira/7-3/uchida.html

(6) ベアトリス・M・ボダルト=ベイリー/デレク・マサレラ編『遥かなる目的地　ケンペルと徳川日本の出会い』（大阪大学出版会　1999）p.15

(7) 「ケンペルの測量」

URL:http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/suv-hanashi/kaempfer.htm

(8) 『遙かなる目的地』 p.19

(9) B.M.ボダルト=ベイリー著　中　直一訳『ケンペルと徳川綱吉　ドイツ人医師と将軍との交流』（中公新書　1994）p.251~255「年表」および地図「ケンペルがたどった10年間の日本への行程」参照

(10) 前掲書　p.3ff.

(11) 「出島」URL:http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/2765/decima/tdj010.htm

(12) a.a.O.「出島の面積、規模」
URL:http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/2765/decima/tdj020.htm

(13) a.a.O.「オランダ船の入港から出港まで」
URL:http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/2765/decima/tdj030.htm

(14) a.a.O.「出島の貿易」
URL:http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/2765/decima/tdj040.htm

(15) 「江戸参府年表」
URL:http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/2765/decima/tdj111.htm

(16) エンゲルベルト・ケンペル著　今井正訳『日本誌』上下（霞ヶ関出版 1973）下巻p.25

(17) Engelbert Kaempfer:Geschichte und Beschreibung von Japan. Hrsg. von Christian Wilhelm Dohm. Lemgo 1777-79. Neudruck:Stuttgart 1964. クリスティアン・ヴィルヘルム・ドーム編纂の原著は『廻国奇観』の中から「製紙法」「鍼術による疝気の治療法」「まぐさ灸」「日本茶」「竜涎香」「鎖国論」など6編の日本関係の論文を選び出して付録としている。原著はHanno Beckの序文をつけてBrockhaus社から1964年に再版された。

(18) 『日本誌』下巻p.445ff.

(19) a.a.O. p.468ff.

(20) 荒野泰典著『「鎖国」を見直す』（川崎市生涯学習事業団　2003）p.3ff.

(21) 同上。p.11ff.

(22) 同上。p.15

(23) 『キリスト教百科事典』（教文館　1986）/同上。p.17

(24) 小堀桂一郎『鎖国の思想：ケンペルの世界史的使命』（中央公論社 1974）参照。

(25) 前掲書『ケンペルと徳川綱吉』および『遥かなる目的地』参照。

(26) エドワード・サイード『オリエンタリズム』平凡社　1986
角山榮「あこがれは、なぜ蔑視に変わったか？」（「大航海」1996. 11月号）

(27) 上掲「鎖国」関連書参照。
ほかに神崎宣武『江戸の旅文化』（岩波書店　2004）、紙屋敦之 / 木村

直也編　展望日本歴史14『海禁と鎖国』（東京堂出版　2002）、大日本文明協会編『欧米人の日本観』上（原書房　1973）